

表2 看護基礎教育の専門分野で必要な教育内容群と教育内容(例) (続 2)

専門分野	教育内容群	教育内容(例)
II 対象者の健康状態に応じた看護	10 健康の保持・増進・予防のための看護	<ul style="list-style-type: none"> ・健康支援のために必要な基礎知識 (健康の定義、健康観、第一次、第二次、第三次予防、ヘルスプロモーション、ウェルネス、QOL、健康に関する指標、人口動態、健康状態と受療状況、生活行動・習慣) ・健康保持・増進と健康教育のために必要な資源 (公衆衛生システム、根拠が証明された健康支援プログラム、健康づくりに有用な根拠ある情報、健康づくりを支える各種機関、人的資源、チームアプローチ、セルフヘルプグループ、地域組織、健康診査等の各種保健施策) ・健康生活を支える予防活動 (予防の概念、健康の保持増進、疾病予防、社会との関係性の中での健康づくり、) ・対象者及び家族の個々の生活に合わせた健康教育 ・家族関係、動機づけ、コーチング、説明力、コミュニケーション技術 ・メンタルヘルスの促進 ・こころの病気の予防・早期対応・社会(職場)復帰への支援 ・妊娠・出産・育児に関わる援助 (妊娠・分娩・産褥の生理と起こりやすい健康障害、妊婦・産婦・じよく婦への看護援助方法、胎児・新生児・乳幼児の生理、新生児・乳幼児と家族への看護援助方法) ・加齢に伴う健康課題を抱えた高齢者と家族への援助 (介護予防の重要性、介護予防のための必要な社会資源と活用方法)
	11 症状のメカニズムとマネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ・症状のメカニズム ・症状の主観的・客観的評価 ・症状緩和のための治療 ・症状と生活行動 ・症状のアセスメント ・症状緩和のための看護(代替補完療法を含む)
	12 急激な健康状態の変化をきたす病態と診断・治療	<ul style="list-style-type: none"> ・急激な健康状態の変化をきたす疾病の種類と病態、症状 ・急激な健康状態の変化をきたす疾病の診断と治療 (救命救急、手術療法、薬物療法、放射線療法、精神療法) ・手術、麻酔による生体反応、合併症とその予防 ・健康状態の変化の早期発見とアセスメント
	13 急激な健康状態の変化がある人の看護	<ul style="list-style-type: none"> ・急激な変化状態にある人の特徴 ・基本的な救急救命処置・状態の変化に伴う症状の変化 ・優先順位を決定する臨床判断 ・起こりやすい合併症 ・治療に伴う二次的障害予防 ・合併症を予防をしながら生活するための支援方法 ・自律/自立を目指したリハビリテーション ・迅速な報告・相談 ・心身に急激な変化がもたらされた対象者に対して必要な治療にともなう看護 ・生命の危機的状態にある人・脱した人の看護 ・精神機能の著しい低下がある患者と家族の看護 ・精神的危機状態にある患者と家族への看護
	14 慢性的な健康障害をきたす病態と診断・治療	<ul style="list-style-type: none"> ・慢性的な健康障害をきたす疾病の種類と病態、症状 ・慢性的な健康障害をきたす疾病の診断と治療 (薬物療法、放射線療法、精神療法、理学療法、食事療法、運動療法、ホルモン療法など) ・合併症の予防 ・緩和医療
15 慢性的な健康障害がある人の看護	<ul style="list-style-type: none"> ・各発達段階における療養生活の特徴 ・慢性期における各種の機能障害と症状 (呼吸、循環、栄養代謝、内部環境、生体防御、運動、排泄、性・生殖) ・慢性的な健康障害がライフサイクルや生活に及ぼす影響(QOL) ・健康障害の慢性期にある患者人におこりやすい合併症 (廃用性症候群、薬物療法と副作用、生活機能障害等) ・各種の治療法 ・リハビリテーションの概念と方法 (リハビリテーションの場、地域リハビリテーション、国際生活機能分類(ICFモデル)) ・ストレスマネジメント、ストレスコーピング ・ノーマライゼーション ・ストレス関連疾患の看護 ・地域生活を支援するためのソーシャルサポート・社会資源(保健・医療・福祉制度、患者会・家族会など)を活用した看護 ・各種の治療法を継続するための看護(患者教育と家族教育、エンパワメント) ・症状マネジメントの理解と看護 ・障害受容の過程と看護 ・慢性期にある患者と家族への看護 (エンパワメント、環境調整、移行期ケア、チームケア、就労・就学支援) 	

表2 看護基礎教育の専門分野で必要な教育内容群と教育内容(例) (続3)

専門分野	教育内容群	教育内容(例)
Ⅱ 対象者の健康状態に応じた看護	16 安らかな死を迎えるための看護	<ul style="list-style-type: none"> ・終末期にある人の特徴 (身体的特徴、心理的・社会的・霊的特徴) ・死の概念、死の徴候、死生観 ・症状のメカニズム (倦怠感、疼痛、浮腫、呼吸器症状、消化器症状、精神症状) ・症状緩和のための治療(セデーションなど) ・症状緩和のための看護(代替補完療法を含む) ・身体的機能低下への看護 ・終末期患者の日常生活行動と看護 ・緩和ケアにおけるチーム医療と連携 (医療者の役割・連携、医療者のストレスと対処方法) ・死をめぐる倫理的課題 (真実を伝える、バッドニュースの伝え方、意思決定) ・看取り、エンゼルケア ・家族支援(グリーフケア等)
Ⅲ 社会の変化と看護の統合	17 保健・医療・福祉の動向と看護の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・保健・医療・福祉の動向と看護の課題 ・超高齢社会における健康課題と看護の役割 等 (住み慣れた地域で最期まで暮らすための健康管理、最期までその人らしく生きることを支えるための支援、認知症高齢者と家族への支援、介護家族の理解と支援、意思決定支援、権利擁護、高齢者虐待の予防、安全確保と身体拘束) ・少子社会における健康課題と看護の役割 (親性準備に対する支援、安心して子育てできる支援、虐待の予防と対応など) ・看護の今後の展望
	18 災害と看護	<ul style="list-style-type: none"> ・災害医療の特徴 (災害サイクル、災害医療体制、トリアージ、多職種チームにおける連携、関連法規など) ・災害による日常生活への影響 ・災害に関連した健康問題と看護 ・災害とこころのケア(被災者、遺族、救援者) ・災害時における看護の役割(災害時要援護者への対応)
	19 国際的視点からの医療・看護	<ul style="list-style-type: none"> ・保健医療の国際協力(種類、しくみ、機関) ・日本および国際的な看護専門職団体(日本看護協会、ICN、ICM) ・EPAによる外国人看護師の受け入れ ・在日・滞日外国人の健康課題
	20 看護に必要な能力の統合とキャリア発達	<ul style="list-style-type: none"> ・セルフマネジメント (自己洞察、論理的思考、批判的分析力、ストレスマネジメント等) ・専門職としてのキャリア発達 (看護職の専門性の発達とその意義) ・生涯学習の意義と活用できる資源 (卒後教育、継続教育、学会等) ・生涯学習としての看護教育制度の理解 ・政策と看護の関連性の理解 ・看護実践への研究成果の活用 ・看護に必要な能力の統合

V. 結果

1. 新たな実習の枠組みの概要

前章で述べた「新たなカリキュラムの枠組みと教育内容(例)」を分析し、実習でしか学べない内容や実習で学ぶことが効果的な内容や能力を抽出し、学習の順序性(レベル)を検討して、新たな実習の枠組みを作成した。すなわち、新たなカリキュラムの枠組みである「看護の基盤」「対象者の健康状態に応じた看護」「看護の統合」の分野ごとに実習科目を配置し、各実習の科目名、目的を明確にした。単位数は計 23 単位とした(表 3)。

実習科目は、「看護の基盤」では、「看護基盤実習Ⅰ」および「看護基盤実習Ⅱ」とし、「対象者の健康状態に応じた看護」では、「ヘルスプロモーション実習」、急激な健康状態の変化にある対象への看護を実践する「急性期看護実習」、慢性的な健康障害がある対象者への看護を実践する「慢性期看護実習」とした。そして「看護の統合」では「統合看護実習」とした。

実習では看護実践能力の育成を意図している。能力の育成には、実習に関連するシミュレーション学習、実習での体験についてのリフレクションやディスカッションを組み合わせることで、臨地での体験を振り返り学習の深化をはかる。そのために、それぞれの実習の目的が効果的に達成されるように実習と演習を組み合わせることを行なうこととした。また、臨地と演習の時間配分もそれぞれの実習の目的や実習の段階に応じて調整できることとする。

2. すべての実習においてコアとなる概念

看護学の実習として積み上げることができるように、「概念に基づく実習」を導入した。看護の実習で、「どの実習でもおさえるべき重要な概念」は何かについて、従来のカリキュラムの実習目標や新しいカリキュラム(案)の学習内容を分析し、「コミュニケーション」「生活と健康」「エビデンスに基づく実践」「倫理」「安全」「チーム医療」を挙げた。各々の概念についての学習を、各実習でどのように積み上げるかの例を表 4 に示した。

3. 各実習の概要

新たなカリキュラムの枠組みの検討によって作成された 6 の実習科目について、それぞれの実習目的、実習目標、実習方法、実習内容や実習場所を検討し、各実習の目的と展開(案)を作成した。以下にそれぞれの実習の概要を述べる。

1) 看護基盤実習Ⅰ

看護基盤実習Ⅰは、看護を志す学生にとって初めての看護学実習である。今日の学生は、生活体験や社会体験が乏しいといわれているが、今後、在院日数がこれまで以上に短縮化されることを予測すると、学生が退院後の生活をイメージ化できることは重要である。また、看護においては、人間関係形成の基礎的能力として、コミュニケーションが重要である。そのため、本実習では、まず地域で健康に生活する、あらゆる発達段階にある人々と

表3. 実習科目と目的(案)

枠組	科目名	目的	単位数
看護の基盤	看護基盤実習Ⅰ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者と自己の発する言葉の意味や感情の理解を深めながら、関係性を築くためのコミュニケーション手段を考える。 2. 地域で暮らす人々の生活環境と健康について理解する。 3. 入院や入所することによる対象者の生活への影響を理解する。 	2
	看護基盤実習Ⅱ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 援助的関係を形成するためのコミュニケーションを実践する。 2. 健康障害を持ちながら入院生活を送る対象者を理解し、ニーズに応じた看護を実践する。 3. 健康障害を持つ対象者の継続的な治療・看護について理解する。 4. 対象者に関わる多職種の役割を知る。 	2
対象者の健康状態に応じた看護	ヘルスプロモーション実習 (現行カリキュラムの母性看護学実習の内容を含む)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域で生活する人々の健康状態をアセスメントし、健康の保持・増進について考える能力を身につける。 2. 地域で生活しているあらゆる発達段階にある人々の成長・発達の特徴を理解し、それに応じた健康への支援を考える。 3. 妊娠・出産・育児期にある人の健康保持および正常からの逸脱を予防するための支援を実践する。 4. 実習地域における地域包括ケアシステムの現状と望ましいあり方を法律・施策と関連づけて理解する。 5. ヘルスプロモーションに関連づけて政策や法律および社会資源を理解する。 	4
	急性期看護実習	<ol style="list-style-type: none"> 1. 急激な健康状態の変化を系統的にアセスメントする能力を育み、ケアの優先順位を判断する。 2. 急激な健康状態の変化をきたした対象者に最も相応しい生活のレベルを考慮し、その状態にあわせた回復への援助を理解する。 3. 対象者の状態にあわせて治療が変化する急性期医療の特徴を理解する。 	4
	慢性期看護実習 (現行カリキュラムの精神看護学実習、在宅看護実習の内容も含む)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 慢性疾患を抱えあらゆる生活の場で療養している対象者及び対象者を取り巻く人々がその人らしく生きることができるよう、QOLの向上をめざしエビデンスに基づいた看護を計画的に実践する。 2. 療養の場における対象者の安全なケア環境を確保する。 3. 地域包括ケアにおける医療チームの一員として多職種の機能役割と相互連携および社会資源の活用について理解する。 	8
統合看護	統合看護実習	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全体像から優先順位を考え、対象者の状況や個性にあわせてエビデンスに基づく看護を実践する。 2. 組織における看護職および他職種の役割を理解し、看護チームの一員として責任をもって行動する。 3. 医療安全の概念と組織的取り組みの重要性を理解する。 	3

合計 23 単位

表4. 看護学実習における基本概念と各実習での学習目標(例)

概念 \ 実習	看護基盤実習Ⅰ	看護基盤実習Ⅱ	ヘルスプロモーション実習
コミュニケーション	対象者との関係性を築くためのコミュニケーション方法を工夫する	対象者との援助的関係を築くためのコミュニケーションを実践する	対象者との関係性を築くため、対象者にふさわしいコミュニケーションを実践する
生活と健康	様々な発達段階にある人々の生活の特徴を理解する	健康障害を持ち、入院生活を送っている対象者の基本的ニーズを理解する	地域や施設で生活を送っている人々の発達段階における健康課題についてアセスメントする
エビデンスに基づく実践	対象者への看護師の援助を通して看護の働きを理解する	対象者のニーズを理解し、根拠を考えながら看護を実践する	地域や施設で生活を送っている人々の発達段階における健康に対する支援、または課題に対する支援を実践する
倫理	対象者の尊厳と人権の意味を理解し、倫理的態度をもって行動する	対象者と対象者を取り巻く周囲の人々の思いを尊重した支援を考える	対象者と対象者を取り巻く周囲の人々の意思決定を支援する方策を理解する
安全	対象者の安全で安楽な環境を理解する	生活環境を知り、安全で安楽な環境について考える	対象者の安全に配慮した支援を考える
チーム医療	実習グループメンバーおよび指導者へ報告・連絡・相談を実践する	対象者に関わる看護職および他職種の役割を理解する	地域や施設で生活を送っている人々に関わる多職種の役割を理解する

概念 \ 実習	急性期看護実習	慢性期看護実習	統合看護実習
コミュニケーション	急激な変化状態にある対象者の状態に合わせ、安心感を与えるような適切なコミュニケーションを実践する	継続的な治療に取り組む対象者を支えるコミュニケーションを実施する	チーム医療メンバーとのコミュニケーションをとる
生活と健康	対象者の病態と治療の関連を理解し、治療による日常生活の制限から生じる身体的・心理的苦痛をアセスメントする	慢性的な健康障害を抱えた対象者の個別的な環境や生活を踏まえ、健康上の課題についてアセスメントする	あらゆる場で生活・療養する人々の療養環境の調整と、そこで必要な看護を理解する
エビデンスに基づく実践	対象者の状態にあわせたケアの優先順位を考え、起こりやすい合併症や異常の早期発見を考慮して、エビデンスに基づく看護を実践する	安全で効果的な治療を支え、対象者のQOLの向上をめざしてエビデンスに基づく看護を実践する	看護実践に必要な基礎知識と技術を統合してエビデンスに基づく看護実践をする
倫理	生命の危機状態にあり特殊な治療環境下にある患者の人権を擁護する	対象者と対象者を取り巻く周囲の人々の意思を尊重し倫理的課題の解決に向けて検討する	組織における倫理規範を理解し、看護専門職としての責務を自覚した行動をとる
安全	急激な健康状態の変化をきたしている対象者の、治療や看護を実践する上での安全確保の重要性について理解する	個別的な状況にある対象者に起こりうる危険を予測し、その治療および生活を支える安全を確保する	組織における医療安全の取り組みについて理解する
チーム医療	急性期医療における看護師と他職種の役割を理解する	継続的な治療に取り組む対象者を支える多職種のチームアプローチを理解する	組織内外のチームにおける連携・協働を理解する

表5. 看護基盤実習 I の目的と展開(案)

<p>目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者と自己の発する言葉の意味や感情の理解を深めながら、関係性を築くためのコミュニケーション手段を考える。 2. 地域で暮らす人々の生活環境と健康について理解する。 3. 入院や入所することによる対象者の生活への影響を理解する。 	<p>実習単位: 2単位 地域と施設での実習を組み合わせる</p>		
実習目標	実習内容	実習方法	実習場所
<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者と自己の発する言葉の意味や感情の理解を深めながら、関係性を築くためのコミュニケーション手段を考える。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の言動を共感的にありのままに受け止める。 2) 対象者の視点に立って言動の意味を考え理解を深める。 3) 対話における対象者と自己の関わりや行動を振り返る。 2. 地域で生活を送っている人々の生活と健康について理解する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 様々な発達段階にある人々の生活の特徴を把握する。 2) 人々の生活様式・背景と健康との関連について考える。 3) 人々の健康に対する思いを把握する。 3. 入院または入所している対象者の日常生活を理解し、看護の役割について理解する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の生活環境を理解する。 2) 対象者の安全で安楽な環境を整える。 3) 対象者が必要とする日常生活援助について理解する。 4. 対象者の尊厳と人権の意味を理解し、倫理的態度をもって行動する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の価値観、生活習慣を尊重する。 2) 対象者のプライバシーや個人情報を保護する。 3) 看護学生として責任ある行動をとる。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者の生活習慣、価値観、信条、生き方、役割、発達段階の理解 2. 看護の対象としての人間理解とイメージ化 (人間を統合的存在として全体論モデルで捉える) 3. 健康レベル(健康増進・疾病予防、早期発見、早期治療、リハビリテーション、終末期)の把握 4. 健康に関する考え方・思い(感情)の理解 5. 対象者中心のコミュニケーションの技法 6. 言語的コミュニケーション技能 7. 非言語的コミュニケーション技能 8. 自己のコミュニケーションの傾向の把握 9. 対象者の療養環境の理解 10. 安全で安楽な環境の整備 11. 対象者に関わる看護師の役割の考察 12. 看護者の倫理原則に基づく実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で生活を送っている対象者と、生活の場や活動の場で接し、コミュニケーションを図る。 ・対象者の生活や役割に対する思いを活動と対話を通して知る。 ・グループディスカッションを行い、様々な対象者について知る。 ・プロセスレコードやグループディスカッションにより振り返りを行い、コミュニケーションの在り方を学ぶ。 ・病院(病棟・外来など)見学、施設見学、看護師のシャドーイングにより、対象者の療養について知る。 ・看護者としての態度と対象者に必要な倫理的配慮をカンファレンスで検討する。 ・倫理についての既習したことを、臨地実習の場で活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のサークル ボランティア団体 公民館 生涯学習センター 地域福祉活動の場 ・病院、クリニック (病棟・外来) 介護療養型医療施設 介護老人保健施設 介護老人福祉施設

触れ合う中で、その人の生活の場を知り、コミュニケーションをとりながら関係形成について学ぶ機会とする。

また、健康障害を来たして通院または入院している人とコミュニケーションをとり、基本的な看護ケアを体験することにより、対象者に対するケアについて学ぶ入り口とする。これらの経験を通して、人間と環境および健康の相互関連について考えるとともに、人間関係形成に必要な能力を身につけ、地域包括ケア時代を担う学生の看護の基盤づくりとなる実習とする。

実習単位数は2単位とし、その内訳は、地域で健康に生活を送る人々について理解するための実習と、病院や施設などで療養生活を送る対象者について理解するための実習を合わせたものとする。

(1) 目的

看護の対象となる人および環境と健康の関連性を捉えていけるように、「1.対象者と自己の発する言葉の意味や感情の理解を深めながら、関係性を築くためのコミュニケーション手段を考える。」「2.地域で暮らす人々の生活環境と健康について理解する。」「3.入院や入所することによる対象者の生活への影響を理解する。」ことで、看護の対象となる人やその人々との人間関係の構築の方法について考え学ぶことを目的とした。

上記の目的に基づき、看護基盤実習Ⅰの実習目標および展開について表5に示す。

(2) 目的を達成するための方法

学内で学んだ、コミュニケーション技術を用いて、地域で生活している対象者と、生活の場や活動の場で接し、コミュニケーションを図る。対象者の生活や役割に対する思いを、活動と対話を通して知る。そして、地域で生活する人々の生活習慣、価値観、信条、生き方や健康に関する考え方・思い(感情)などについて、身体的・精神的・社会的・文化的に幅広く捉える。学生個々が捉えた情報を、学生間のグループディスカッションなどにより共有し、地域で生活する様々な発達段階にある人々の生活環境と健康の繋がりをイメージ化する。また、プロセスレコードやグループディスカッションにより、自己の発言について振り返りを行い、コミュニケーションの在り方や工夫についても学ぶ。

施設に通院もしくは入院し、療養生活を送る対象者の体験を通して、入院による生活への影響や療養環境を知り、安全で安楽な環境、対象者の健康への思いなどについて理解する。病棟・外来見学、施設見学および看護師のシャドーイングを通して、看護の役割や働きについても理解する。

対象者の尊厳と人権の意味を理解し、倫理的態度を持って行動することの重要性について、学生間のカンファレンスで考察する。看護学生として責任ある行動がとれるように、対象者に必要な倫理的配慮などについて学習する。また、実習グループメンバーおよび指導者への報告・連絡・相談の重要性についても考え、実践できるようにする。

2) 看護基盤実習Ⅱ

看護基盤実習Ⅱは、学生が健康障害を持つ対象者を受け持ち、既習の看護学の知識や技術を応用しながら、個々のニーズに応じた看護援助を実践するための、基盤となる力を養う実習である。本実習の前には看護基盤実習Ⅰを履修しており、対象者を理解し、関係性を築くためにふさわしいコミュニケーション技術を習得している。本実習では、そのコミュニケーション技術を用いながら、健康障害を持つ対象者の基本的ニーズを把握し、未充足のニーズに対して看護援助を実践する。同時に、対象者に行われている基本的な治療と看護についても理解し、常に根拠をもって援助を考える習慣を身につける。看護援助の実践では、既習の原理原則に基づいた基礎看護技術を、対象者に合わせて応用し提供するための基礎的能力を修得する。看護実践能力の向上として、対象者を理解し、基礎看護技術を用いた援助の経験を積むことに重点を置く。一方、対象者に行われている治療や看護を学ぶことで、対象者を支えるために看護職と協働している他職種の役割についても知ることを目指している。そして、医療チームの一員としての自覚を持ち、看護学生として果たすべき役割について考えるきっかけにする。さらに、対象者への看護援助を通して看護専門職としての倫理的配慮や対象者の安全確保といった責任ある行動についても自ら考え実践することが求められる実習である。実習の単位数は2単位とする。

(1) 目的

受持ち対象者に必要な看護援助を考え実践できるように、「1.援助的關係を形成するためのコミュニケーションを実践する」「2.健康障害を持ちながら入院生活を送る対象者を理解し、ニーズに応じた看護を実践する」「3.健康障害を持つ対象者の継続的な治療・看護について理解する」ことを目的とした。加えて、看護基礎教育の段階でチーム医療の実践を意識できるように、まずは基礎的知識の習得として「4.対象者に関わる多職種の役割を知る。」ことも目的に加えた。

上記の目的に基づき、看護基盤実習Ⅱの実習目標および展開について表6に示す。

(2) 目的を達成するための方法

はじめに、健康障害を持つ受け持ち対象者に看護援助を実践できるように、看護師のシャドウイングを行いながら援助に参加する。その後、対象者とのコミュニケーションや記録物から情報を収集する。その中で、看護を必要とする対象者が、入院によってどのように生活環境が変化し、どのような思いで入院生活を送っているのか、その思いを受け止め考察する。行われている治療や看護についても自己学習し、その影響も考慮して対象者の理解につなげる。そして未充足なニーズを導き出し、基礎看護技術を用いて必要な看護援助を実践する。また、多職種が対象者をどのように支えているかを理解する。その方法として、看護チームカンファレンスや多職種カンファレンスに参加し、多職種の機能や役割を理解する。機会があれば、他職種のスタッフが対象者と関わる場面を見学したり、他職種主催の研修会等に参加する。

実習期間を通して、看護専門職としての倫理的行動について考え、実践するために、既

表6. 看護基礎実習Ⅱの目的と展開(案)

<p>目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 援助的関係を形成するためのコミュニケーションを実践する。 2. 健康障害を持ちながら入院生活を送る対象者を理解し、ニーズに応じた看護を実践する。 3. 健康障害を持つ対象者の継続的な治療・看護について理解する。 4. 対象者に関わる多職種役割を知る。 	<p>実習単位：2単位</p>		
<p>実習目標</p>	<p>実習内容</p>	<p>実習方法</p>	<p>実習場所</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者との援助的関係を築くためのコミュニケーションを実践する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対人技法を用いて対象者を尊重したコミュニケーションをとる。 2) コミュニケーションを通して、健康障害のある対象者の基本的ニーズを把握する。 3) コミュニケーションを通して自身の特徴を理解する。 2. 健康障害のある対象者を全人的に把握しニーズに応じた看護を実践する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 健康障害のある対象者の身体的・精神的情報および社会的・文化的背景を把握する。 2) 健康障害が日常生活に及ぼす影響をアセスメントする。 3) 対象者に対してニーズに応じた看護を、根拠を考えながら実践する。 3. 看護専門職としての倫理的行動について考え実践する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の意思を尊重しながら同意を得て看護援助を実践する。 2) 看護学生として責任ある行動をとる。 4. 対象者が安全な療養生活を送られるように援助する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の療養環境を安全に整える。 2) 対象者の安全・安楽に配慮し看護援助を実践する。 5. 対象者の看護援助を通して、医療チームにおける看護職および他職種の機能・役割を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 施設内の多様な場における看護師の機能・役割を理解する。 2) 対象者を支える他職種の機能・役割を理解する。 3) 医療チームの一員として果たすべき役割を考える。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入院による生活環境の変化や健康障害を持ちながら入院生活を送っていることに対する思いの把握 2. 疾患や治療によって受けた影響の理解 3. 基本的ニーズの把握 4. 援助の必要性のアセスメント 5. 基本的ニーズ充足のための看護援助の実践 6. 看護者の倫理原則に基づく実践 7. 看護における倫理上の問いについての考察 8. 対象者の危険につながる環境要因の把握、除去 9. 安全を確保した看護援助方法の考察、実践 10. 専門看護師、認定看護師などを含む、看護職の機能および役割の把握 11. 対象者を支える看護職以外の職種の役割の理解 12. 医療チームの一員として果たすべき役割の考察 	<ul style="list-style-type: none"> ・受持ち対象者に看護援助を実践できるように、対象者のニーズを考えながら看護師のシャドーイングを行う(一部実施)。 ・入院患者を一人受け持ち、コミュニケーションや記録物から情報を収集する。 ・基礎看護技術を用いて必要な看護援助を実践し、評価する。 ・学生間のカンファレンス等で、看護における倫理上の問いについて意見交換、考察する。 ・対象者個々に応じた安全確保の視点をカンファレンスで話し合う。 ・安全に配慮した援助計画を立て実践し、評価する。 ・看護師のシャドーイングを行いながら看護援助に参加する。 ・看護チームカンファレンスに参加する。 ・他職種が対象者と関わる場面を見学する。 ・多職種カンファレンスに参加する。 ・学生間のカンファレンスでチーム医療について意見交換する。 	<p>・病院(病棟・外来)</p>

習の看護者の倫理原則を復習して実習に臨み、看護における倫理上の問いについて考察する。看護専門職としての倫理的行動について考え実践するために、看護師の第一の責任は誰に対してのものか、看護師としてなすべきこと・なすべきでないことは何か等について考察し、カンファレンスにて話し合いグループ内で共有する。対象者の安全面への配慮としては、安全な療養生活を送られるように危険につながる環境要因を把握した上で環境整備を実施する。また対象者の個々に応じた安全確保の視点をカンファレンスで話し合い、安全に配慮した援助内容を考え、実践し、評価する。

以上のように、本実習は、健康障害を持ちながら入院生活を送る対象者に看護援助を実践するため、実習場所を医療施設内の病棟とする。また、多職種の役割を理解するために、必要であれば外来にもその範囲を拡げる。

3) ヘルスプロモーション実習

従来の看護基礎教育における実習は疾病を持ち、医療施設で治療を受けている人を対象とした実習が中心であった。新たな実習の枠組みでは「対象者の健康状態に応じた看護」の展開として、健康状態に変化をきたしている人々を対象とした看護を実践する前に、先ず、地域で生活する人々の健康の保持・増進への支援のありかたを考えるヘルスプロモーション実習を組み入れた。

本実習においてはあらゆる発達段階の人々を対象として、発達段階の特徴を理解するとともに、健康を生活スタイルや環境と関連付けて理解し、健康の保持・増進への支援を考える。また、妊娠・出産・育児に関わる援助も含める。さらに、地域で生活する人々が活用可能な保健・医療・福祉に関連する社会資源を法律と関連付けて理解する能力を育成する実習である。

実習目標の到達レベルを、「考える」「理解する」とした理由は学習段階から判断して、健康の保持・増進への支援を実践するレベルに到達することは困難と考えたことによる。ただし、具体的支援を考えて、その一部でも実践できることが望ましい。

実習の単位数は4単位であるが、その展開は2単位ずつ2回に分けて、あるいは1単位と3単位に分けるなど、各教育機関の状況に合わせて自由に展開することを可能とする。

本実習4単位の目的として次の5つを設定した。

(1) 目的

地域で生活する人々の環境やライフスタイルと健康との関連を考え、個々の人の健康の保持・増進のために必要な支援を考えるために「1.地域で生活する人々の健康状態をアセスメントし、健康の保持・増進について考える能力を身につける。」「2.地域で生活している人々のあらゆる成長・発達の特徴を理解し、それに応じた健康への支援を考える。」の2つの目的を置いた。

妊娠・出産・育児期にある人の看護については、現行のカリキュラムでは母性看護学実習2単位が規定されている。しかし、今日の少子化および看護教育機関の増加により、実

表7. ヘルスプロモーション実習の目的と展開(案)

<p>目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域で生活する人々の健康状態をアセスメントし、健康の保持・増進について考える能力を身につける。 2. 地域で生活しているあらゆる発達段階にある人々の成長・発達の特徴を理解し、それに応じた健康への支援を考える。 3. 妊娠・出産・育児期にある人の健康保持および正常からの逸脱を予防するための支援を実践する。 4. 実習地域における地域包括ケアシステムの現状と望ましいあり方を法律・施策と関連づけて理解する。 5. ヘルスプロモーションに関連づけて政策や法律および社会資源を理解する。 		<p>実習単位：4単位 実践例：2単位ずつ2回に分けて実習することも可能</p>	
実習目標	実習内容	実習方法	実習場所
<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域で生活する人々の個々の環境をとらえ、それが健康に与える影響をアセスメントする。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 人々の居住する地域環境を把握する。 2) 人々を取り巻く環境が健康に与える影響を分析する。 2. 地域で暮らす人のライフスタイルを把握し、ヘルスアセスメントをし、健康目標を考える。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者のライフスタイルを把握する。 2) 対象者のライフスタイルを踏まえてヘルスアセスメントをする。 3) 対象者の個性に合わせた健康目標を明確にする。 3. 対象者の発達段階の特徴を理解し、それに合わせた健康への支援を考える。 <ol style="list-style-type: none"> 1) ライフサイクルから見た対象者の発達段階をとらえる。 2) 健康目標を達成するための対象者の発達段階にあわせた支援を考える。 4. 妊娠・出産・育児期にある人の健康保持および正常からの逸脱を予防するための支援を実践する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 妊娠・分娩・産褥期および新生児期にある母子が正常に経過するための援助を実践する。 2) 褥婦が母親役割を円滑に取得できるよう支援する。 5. 援助的人間関係の形成に向けて、対象者にふさわしいコミュニケーション方法を実践する。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の発達段階を理解し、対象者に応じたコミュニケーション方法を工夫する。 2) 対象者の健康状態を考慮したコミュニケーションを実践する。 3) 自分自身のコミュニケーションパターンを知る。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者の発達段階の把握 (特に子どもの成長発達) 2. 多様な生活の場の把握 3. 生活の場の環境の把握 4. 環境と健康の相互作用の把握 5. 対象者のライフスタイルの把握 6. 対象者のヘルスアセスメントの実施 7. 個性に合わせた健康目標の明確化 8. 対象者の発達段階によって起こりうる健康障害や事故の把握、 9. 健康障害や事故の予防の実践(感染予防、安全、メンタルヘルスを含む) 10. 妊婦健康診査の見学 11. 妊婦に対する健康教育の見学 12. 分娩の見学と産痛緩和の援助 13. 褥婦の退行性変化、進行性変化の観察 14. 新生児の観察、清潔ケア(清拭、沐浴など)の実施 15. 母親の育児への支援の実施 16. 対象者の発達段階に応じたコミュニケーションの実践 17. 対象者の健康状態を考慮したコミュニケーションの実践 18. 対象者の価値観の把握 19. 対象者の意思の把握 20. 対象者の価値観や意思を尊重した支援の実施 21. 対象者の居住する地域の地域マップ・社会資源マップの作成 22. 対象者が利用可能な社会資源の把握 23. 対象者の居住する地域の地域包括ケアシステムの把握 24. 実習地域の地域包括ケアシステムにおける課題の把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の様々な発達段階の人々が集合する場所や施設で、その施設の利用者とのかかわりを通して実習する。 ・週2～3日の実習とし、1人の学生が4週間に2～3箇所程度の実習場所を実習する。実習前後で必要に応じて学内で演習をしたり、実習後に個々の学生の学びを報告して共有し、ディスカッションなどを通して学びを深める。 ・妊娠褥婦を対象とした実習 <ol style="list-style-type: none"> ①地域の保健センターの母子健康手帳交付時の面接に立ち会い、妊婦とのコミュニケーションをとる。 ②病院、診療所、地域の保健センターなどの母親(両親)学級などに参加する。 ③病院、診療所などにおいて分娩見学、褥婦・新生児の観察やケアのシャドウイングおよび実践 ・自分とは違う対象者の価値観や人生観等を理解し、対象者の意思を尊重した支援とは何かを考え、実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園、幼稚園 ・地域の子育てサロン ・病院の保健指導部門、健康診査部門、検診実施事業所、診療所 ・スポーツジム(介護予防) ・高齢者サロン ・高齢者施設、介護保険施設、地域包括支援センター ・居宅介護支援事業所等 ・障害者生活介護事業所、障害者就労支援事業所等 ・地域活動支援センター(作業所)、地域相談支援センター ・地域の保健センターなど ・病院・診療所などの出産取扱い施設

表7. ヘルスプロモーション実習の目的と展開(案) (続1)

実習目標	実習内容	実習方法	実習場所
<p>6. 自分とは違う対象者の価値観や意思を尊重して支援する。</p> <p>1) 対象者の価値観や人生観を把握する。</p> <p>2) 対象者の価値観や人生観等に裏付けられた意思を尊重して、支援する。</p> <p>3) 自分の価値観や傾向に気づく。</p> <p>7. 地域における健康を保持増進するための社会資源の実際と制度を理解する。</p> <p>1) 地域住民が利用している社会資源の特徴を理解する。</p> <p>2) 看護職と他職種の連携について理解する。</p> <p>8. 実習地域の地域包括ケアシステムの現状を理解し、望ましいあり方を考える。</p> <p>1) 実習地域の地域包括ケアシステムの現状を把握する。</p> <p>2) 現状の地域包括ケアシステムを根拠となる法律に関連付ける。</p> <p>3) 実習地域の地域包括ケアシステムの課題について考察する。</p>			

習場の確保が困難となっている。したがって、新たなカリキュラムにおいては、従来の母性看護学実習において学習する内容をヘルスプロモーション実習に含めることとし、「3. 妊娠・出産・育児期にある人の健康保持および正常からの逸脱を予防するための支援を実践する。」を目的に含めた。

さらに地域で生活する人々が活用している社会資源や地域ケアシステムを法律と関連付けて理解するために「4.実習地域における地域包括ケアシステムの現状と望ましいあり方を法律・施策と関連付けて理解する。」「5.ヘルスプロモーションに関連づけて政策や法律および社会資源を理解する。」ことも目的に加えた。

上記の目的に基づき、ヘルスプロモーション実習の実習目標および展開について表7に示す。

(2) 目的を達成するための方法

地域の様々な発達段階の人々が集合する場所や施設で、その施設の利用者とのかかわりを通して実習する。対象者の発達段階の特徴や生活する場、その環境について観察やコミュニケーションを通して把握する。保育園、幼稚園、地域の子育てサロンなどでは乳幼児を対象として、子どもの成長発達の特徴を把握し、発達段階によって起こりやすい疾病や事故の予防について考える。病院の保健指導部門、健康診査部門、検診実施事業所などでは、主として成人を対象として個人の生活スタイルや環境と健康との関連について考える実習が可能である。高齢者サロン、高齢者施設では高齢者を対象としていつまでも地域で元気に暮らすための生活支援、介護予防について考える実習が可能である。

本実習は健康の保持・増進、疾病の予防に主眼を置いた実習であるが、価値観の多様化した今日においては健康の概念も多様である。小泉(1986)は、「健康」には客観的に捉える健康と主観的に捉える健康があるとして、病気や障害を持ちながらも自分らしく生きようとする人の持つ健康観を述べている。そこで、障害者生活介護事業所や地域活動支援センター(作業所)などにおいて、障害を持ちながらも地域で生活する人々を対象にした実習も含めた。さらに、超高齢社会の進展に伴い、介護保険施設、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所等を利用している要支援・要介護の人々については、介護予防、重症化予防を視野に現在の健康レベルの向上を目標とした実習として、地域で生活する人々を対象とした生活支援の実習が可能となる。この実習を通して、これらの人々が地域で生活することを可能にしている保健・医療システムや法律を理解することができる。また、対象者の居住する地域の地域マップや社会資源マップを作成することにより、対象者の居住環境を理解するとともに、対象者が利用可能な社会資源を把握することにもつながる。

妊娠・出産・育児期にある人の支援に焦点をあてた実習では、地域の保健センターの母子健康手帳交付時の面接に立ち会い、妊婦とのコミュニケーションをとることや病院、診療所、地域の保健センターなどの母親(両親)学級などに参加してかかわりを深める。出産・育児期の人および新生児を対象とした実習では、病院、診療所などにおける分娩の見学、褥婦や新生児の観察やケアを施設の看護職者とともに実践する。

これらの実習では一人の学生が関わるができるのは限定された発達段階や生活環境にある対象者であるが、必要に応じて学内で個々の学生の学びを報告し合い、ディスカッションすることにより学びを共有し、深める。

4) 急性期看護実習

急性期看護実習は、急激な健康状態の変化にある対象への看護を実践する実習と位置づける。本実習では、急激な健康状態の変化をきたすことが予測される対象者、もしくは、急激に健康状態の変化をきたした対象者や関連する人々への看護が実践できることが望まれる。対象者の具体的な状態には「外的な侵襲を受けた状態」がある。この状態は、事故による外傷や術前術後の変化を含めた周手術期にある状態などを示す。また、「身体内部に変化が生じた状態」として、心筋梗塞や脳梗塞などにより急激に体調の変化が生じ、生命の危機状態にある場合も示す。さらに、「慢性疾患の急激な変化によって生じた状態」は、腎疾患や心疾患、肝臓疾患など慢性疾患を持ちながら日常生活を送っていた人が急性憎悪により、急激な変化が身体に起こり、生命の危機状態に陥る、あるいは、日常生活に支障をきたすというような状態になることもある。このような急激な健康状態の変化にある対象者について、まずは生命を維持するために必要な看護を実習で学ぶ。さらに、対象者の状態にあわせたケアの優先順位の考慮や安全確保の重要性などについても学ぶ。その後、対象者の状態や生活レベルに配慮した回復に向けた援助について考察する。これらを通して、急性期看護を取り巻く環境や看護の特徴が理解できるような実習とする。

実習の単位数は4単位する。施設や対象者の状態にあわせて実習の展開を工夫することが可能である。実習の目的は次に示すとおりである。

(1) 目的

急激な健康状態の変化をきたすことが予測される対象者、もしくは、急激に健康状態の変化をきたした対象者を中心として、「1.急激な健康状態の変化を系統的にアセスメントする能力を育み、ケアの優先順位を判断する。」「2.急激な健康状態の変化をきたした対象者に最も相応しい生活のレベルを考慮し、その状態にあわせた回復への援助を理解する。」「3.対象者の状態にあわせて治療が変化する急性期医療の特徴を理解する。」ことを目的とした。

上記の目的に基づき、急性期看護実習の実習目標および展開について表8に示す。

(2) 目的を達成するための方法

対象者を受け持ち、看護を実践する。対象者は、病院の外来を受診したり病棟に入院していたりする。実習ができる場には、外来として一般外来や救急外来がある。救急外来は夜間の受診者が多いので、緊急性を学ぶためには、必要時、夜間実習を組み入れてもよい。病棟においては、急性期の状態にある対象者は一般の入院病棟に多くいる。さらに、ICU、CCU、手術室などでは、急激な状態の変化をきたした対象者への看護を実践している場であるため、このような場でも見学を通して対象者の理解を深めることが可能である。また、状態が変化した際には、検査、処置等を実施するため、それらの見学ができるように調整

表8. 急性期看護実習の目的と展開(案)

<p>目的 1. 急激な健康状態の変化を系統的にアセスメントする能力を育み、ケアの優先順位を判断する。 2. 急激な健康状態の変化をきたした対象者に最も相応しい生活のレベルを考慮し、その状態にあわせた回復への援助を理解する。 3. 対象者の状態にあわせて治療が変化する急性期医療の特徴を理解する。</p>	<p>実習単位: 4単位</p>		
<p>実習目標</p>	<p>実習内容</p>	<p>実習方法</p>	<p>実習場所</p>
<p>1. 対象者の病態と治療の関連を理解し、治療による日常生活の制限から生じる身体的・心理的苦痛をアセスメントする。</p> <p>1) バイタルサインと意識状態より正常からの逸脱について判断する。</p> <p>2) 逸脱の原因(病態と治療との関連)について考える。</p> <p>3) 治療による日常生活の制限から生じる身体的・心理的苦痛をアセスメントする。</p> <p>2. 対象者の状態にあわせたケアの優先順位を考え、エビデンスに基づく看護を実践する。</p> <p>1) 対象者の状態にあわせたケアの優先順位を考える。</p> <p>2) 対象者の状態にあわせて安全性や苦痛緩和に配慮し、エビデンスに基づく看護を実践する。</p> <p>3) 起こりやすい合併症の予防と異常の早期発見ができる。</p> <p>4) 二次障害を予防するための早期リハビリテーションの様々な方法を理解する。</p> <p>3. 急激な健康状態の変化をきたしている対象者の、治療や看護を実践する上での安全確保の重要性について理解する。</p> <p>1) 緊急時に用いられる薬剤の作用や副作用を理解して投与後の変化を観察する。</p> <p>2) 緊急時に使用する医療機器の管理、取扱いを理解する。</p> <p>3) 急性期に起こりうる事故を予測して予防行動をとる。</p> <p>4) インシデントが発生した際に施設の基準にのっとった行動をとることの重要性を理解する。</p> <p>4. 急激な変化状態にある対象者の状態にあわせ、安心感を与えるような適切なコミュニケーションを実践する</p> <p>1) 対象者および対象者を取り巻く人々の疾患の受け止め方や、抱える苦痛・苦悩を理解する。</p> <p>2) 対象者と対象者を取り巻く人々に精神面に配慮して安心感を与えるような関わりをする。</p> <p>3) 対象者を対象者を取り巻く人々(家族など)の心理状態を考慮した関わりについて考える。</p>	<p>1. 急性の状態にある対象者の観察</p> <p>1) フィジカルアセスメント(フィジカルイグザミネーションとバイタルサインを関連づけてアセスメントする)</p> <p>2) 症状に伴う恐怖・不安の把握</p> <p>2. 対象者のアセスメント</p> <p>3. 対象者の状態の変化の観察と報告</p> <p>4. 観察のABCDの実際についての理解(Airway, Breathing, Circulation, Dysfunction of CNS)</p> <p>5. 集中治療、救命処置の見学</p> <p>6. 対象者の状況にあわせたコミュニケーションの実践</p> <p>7. 対象者の病態や治療に伴う身体的・心理的苦痛の把握</p> <p>8. 急性期における二次障害の予防の実践</p> <p>9. 輸液管理の実際の見学</p> <p>10. 緊急時に用いられる薬剤の種類・取り扱い方法の見学</p> <p>11. 薬剤使用後の対象者の反応の観察</p> <p>12. 輸血、血液製剤の取り扱いの見学</p> <p>13. ME機器の管理、取り扱いの見学</p> <p>14. 急性期に実施される検査の見学(レントゲン、CT、MRIなど)</p> <p>15. 急性の状況において安全を確保しながら対象者へ配慮した支援の実施</p> <p>16. 対象者を取り巻く人々とのコミュニケーションの実践</p> <p>17. 対象者を取り巻く人々の心理的苦痛の把握</p> <p>18. 対象者や対象者を取り巻く人々の意思決定を支えるための看護の見学</p> <p>19. 急性期における多職種連携の見学</p> <p>20. 緊急連絡方法の実際(緊急コール、コードブルーなど)</p> <p>21. 早期リハビリテーション等の見学</p> <p>22. 急性の状態にある対象者への治療・看護において生じる倫理的課題についての考察</p>	<p>・急性の状態にある対象者を受け持ち看護を実践する。あるいは、看護師と共に看護を実践する。 急性の状態とは 1) 外的な侵襲を受けた状態(例:事故、手術など) 2) 身体内部に急激な変化が生じた状態(例:心筋梗塞、脳梗塞など) 3) 慢性疾患が急激に増悪した状態(例:腎疾患の急性増悪など)</p> <p>・手術;周手術期における患者の変化を理解するために、入院(術前)～手術当日～術後、早期リハビリテーション～退院まで受け持つ。</p> <p>・状態の急変;急変する前の状態と比較しながら急変後の看護を考える。</p> <p>・対象者の状態が刻々と変化する状態について、観察、アセスメントを行い、実践に結びつける。</p> <p>・対象者の治療に関連すること(輸液管理、薬剤、ME機器等)の理解を深める。</p> <p>・各種検査(経過観察が必要な)等の見学を行う。</p> <p>・見学あるいは実践した看護をグループディスカッションを通して振り返り、対象者への看護の必要性を考える。</p> <p>・看護師が実践しているコミュニケーションを見学することで方法を学ぶ。</p> <p>・実践したコミュニケーションについてグループディスカッションを通して振り返り、対象者の状態に合わせたコミュニケーションの方法について再考する。</p>	<p>・手術室</p> <p>・外科病棟</p> <p>・内科病棟(急性期)</p> <p>・術後管理病棟</p> <p>・ICU・CCU</p> <p>・救命救急センター</p> <p>・外来</p>

表8. 急性期看護実習の目的と展開(案) (続1)

<p>5. 急性期医療における看護師と他職種役割を理解する。</p> <p>1) 急性期医療においては多職種が専門性を発揮して協働することを理解する。</p> <p>2) 急性期医療チームにおけるそれぞれの職種の役割を理解する。</p> <p>3) 急性期医療チームにおける看護職の役割と機能を理解する。</p> <p>6. 生命の危機状態にあり特殊な治療環境下にある患者の人権を擁護する。</p> <p>1) 急性期における対象者および対象者を取り巻く人々の意思決定を支える。</p> <p>2) 急性期医療における倫理的課題に気づき解決に向けて検討する。</p> <p>3) 急激な健康状態の変化をきたしている対象者の安全を確保する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・緊急時や急変時に看護師や他職種が実践していることを見学する。 ・見学した内容について、グループディスカッションを通して振り返り、看護師や他職種の役割について考える。 ・実施した内容や見学した内容について、グループディスカッションを通して振り返る。 	
---	--	--	--

することも必要となる。

急激な状態の変化が落ち着いてきたら、対象者の生活も踏まえ、異常の早期発見のための観察、合併症を予防する看護、必要時、回復に向けた援助(リハビリテーションなど)が実践できるように調整する。

これらの場において、対象者の観察、アセスメント、実施を行うが、生命の危機状態にある対象者は刻一刻と状態が変化しているため、まずは生命を維持するケアが優先となる。したがって、観察することや状態の変化を確認することなどの重要性を学生に伝え、そのような状態にある対象者とどのようにかかわることが必要なのかを考えるような実習とすることも大切である。対象者が急性期の状態でも学生にとってかかわりがもてるような実習内容とするためには、臨地実習だけではなく、学内演習を活用し、ケアの振り返りを実施する。

学内演習は、病院での実習をより効果的に実施できるようにケアの振り返りを行う機会とする。グループディスカッションを通して、グループ内で共有することで新たな課題が見出される。このように、実習と演習を繰り返すことにより、学生の考えを系統的に導く機会となるので、実習において演習での振り返りの時間を有効に活用することが望まれる。

5) 慢性期看護実習

慢性期看護実習は、健康状態に慢性的な変化がある対象者への看護を実践する実習と位置づける。慢性疾患を持つ人は、長期にわたる療養が必要であり、病と共に生きていくことを余儀なくされる。対象は小児から高齢者まで様々であり、疾患への向き合い方や個々の生活背景も考慮し、様々な因子を関連づけながら看護の方向性を考えていく高度な力が求められる。慢性期看護実習では、看護基盤実習とヘルスプロモーション実習を経て培ってきた能力を活かし、慢性疾患を持つ一人の対象者を受け持ち、慢性期から人生の終焉を迎える時期であるエンド・オブ・ライフまでの幅広い経過の中にある対象者が継続的に治療に取り組めるよう、援助的関係を形成するためのコミュニケーション能力や対象者を全人的にアセスメントし、看護を計画、実施、評価するプロセスを展開する力を身につける。さらに、入院治療から在宅医療までの一連をつなぎ、継続した看護について学ぶ。また、慢性期の対象者を取り巻く保健・医療・福祉専門職におけるチームケアについて理解し、チームの一員としての行動がとれることを目指している。

そこで、本実習では慢性疾患を抱えあらゆる場で療養・生活している対象者及び対象者を取り巻く人々がその人らしく生きることができるよう地域包括ケアにおける医療チームの一員として、安全かつ個々の健康の維持・増進とQOLの向上をめざした看護を学ぶ。

実習単位数は8単位とし、一般病床(慢性期疾患を対象とする病棟であり小児病棟含む)、精神病床、療養病床(回復期リハビリテーション病棟・療養病棟)、退院支援部門を含む外来、緩和ケア病棟、訪問看護ステーションなどを組み合わせて行うこととする。8単位は実習の目的に応じて1~4単位で運用可能とする。

表9. 慢性期看護実習の目的と展開(案)

<p>目的</p> <ol style="list-style-type: none"> 慢性疾患を抱えあらゆる生活の場で療養している対象者及び対象者を取り巻く人々がその人らしく生きることができるよう、QOLの向上をめざしエビデンスに基づいた看護を計画的に実践する。 療養の場における対象者の安全なケア環境を確保する。 地域包括ケアにおける医療チームの一員として多職種の機能役割と相互連携および社会資源の活用について理解する。 	<p>実習単位：8単位 現行カリキュラムの精神看護学実習、在宅看護実習の内容も含む</p>		
実習目標	実習内容	実習方法	実習場所
<ol style="list-style-type: none"> 慢性的経過をたどる対象者及び対象者を取り巻く人々に対して援助的関係を形成する。 <ol style="list-style-type: none"> 対象者及び対象者を取り巻く人々の訴えに耳を傾け、共感的態度で受け止める。 対象者及び対象者を取り巻く人々の立場に立って、その人の言動にはどのような意味があるのか考える。 対象者及び対象者を取り巻く人々との相互作用を振り返り、自己洞察を深める。 治療的な関係形成にむけたコミュニケーションを実践する。 慢性的な疾患を抱えた対象者の個別的な環境や生活習慣および疾病・治療について全人的に理解し、健康上の課題を明らかにする。 <ol style="list-style-type: none"> 対象者の生活習慣と疾病との関連性を考える。 病状悪化、重症化のリスクと、対処能力を理解する。 対象者の生きがいや価値観が疾患および日ご管理に与える影響を埋 解する。 対象者の多様な生活の場の特徴を理解する。 長期にわたる療養生活を送る対象者の苦痛や苦悩を理解する。 対象者の健康障害に対する本人及び対象者を取り巻く人々の受け止め 方や、受容過程を理解する。また、終末期に向かう対象者の受容過程を理解する。 対象者に、検査・治療・処置が及ぼす影響について理解する。 1)～8)を統合してアセスメントを行い、健康上の課題を特定する。 	<ol style="list-style-type: none"> 受け持ち対象者及び対象者を取り巻く人々との信頼関係の構築 傾聴、共感、受容の重要性への気付きと実践 対象者及び対象者を取り巻く人々との相互作用の理解と自己洞察 対象者の苦痛や受容過程の理解 カルテ、対象者、医療従事者より対象者情報を把握 <ol style="list-style-type: none"> 入院前の生活習慣、生きがい、価値観の把握 現在の生活環境や社会環境の把握 疾病の理解 検査、治療、処置の目的・種類・方法の理解 健康上の課題の抽出 生活の視点を踏まえた援助(日常生活援助、アクティビティケアなど) 長期療養に伴うストレス・不安への援助 疾病と共存しながら生活できるような支援 症状に伴う対象者の苦痛の緩和 治療・処置・検査に伴う対象者の苦痛の軽減 セルフケア能力が発揮できるような対象者及び対象者を取り巻く人々への支援 在宅生活の継続を踏まえた退院支援 社会に適応できるような支援 対象者の意思決定の支援 倫理的配慮・課題の理解 倫理的課題の解決に向けた検討 安全な環境を保証するための関係法規や各種ガイドラインの理解 病棟におけるリスクマネジメント・安全基準についての理解 病棟におけるインシデント・アクシデント発生時の対応方法の理解 インシデント・アクシデントが発生した場合の速やかな報告 対象者の機能や行動特性に合わせた安全対策の実施 保健・医療・福祉の療養の場の特徴の理解 各職種の専門性の理解 療養の場に応じた看護の専門性の理解 多様な社会資源の活用に向けた理解 継続看護の必要性と連携の理解 看護援助に伴う報告・連絡・相談 	<ul style="list-style-type: none"> 対象者を一定期間、継続的に受け持ち、アセスメント、計画、実施、評価のプロセスを実践する。 対象者が退院し、地域で継続的に看護が必要な場合はそれに応じて柔軟に実習場所を変更することも可能である。 訪問看護ステーションでは、慢性疾患を持ちながら地域で生活している対象者への看護を学ぶ。 対象者に必要な各種の検査・治療・処置の見学・実施は入院及び外来実習で行う。 緩和ケア病棟、療養病床ではエンド・オブ・ライフケアについて学ぶ。 見学あるいは実践した様々な体験をグループディスカッションを通して振り返り、学生間で共有する。 学内演習により、様々な実習での体験を整理・統合し、受け持ち対象者への看護に反映させる。 倫理的課題について多面的にとらえ、建設的に解決策を検討できるようカンファレンスで意見交換する。 病院・病棟での安全基準やインシデント・アクシデント時の対応方法についてオリエンテーションを受け、受け持ち対象者へ安全な看護を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 一般病床(慢性期病棟、小児科病棟など) 精神病床 療養病床 外来 緩和ケア病棟 訪問看護ステーションなど

表9. 慢性期看護実習の目的と展開(案) (続1)

実習目標	実習内容	実習方法	実習場所
<p>3. 慢性的経過をたどる対象者に対し、安全かつ効果的に治療が行えるよう、また、QOLの向上をめざしてエビデンスに基づく看護を実践する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の心身の発達段階や生活機能障害を踏まえて実施可能な看護計画を立案する。 2) エビデンスに基づいた個別的な看護を計画する。 3) 計画した看護援助を安全・安楽・自立に留意し実施する。 4) 対象者及び対象者を取り巻く人々が必要な治療計画を生活の中に取り入れられるように支援する。 5) 病状悪化、重症化の予防や健康維持に向けて継続的に支援する。 6) 慢性的な健康障害を有しながらの生活の質(QOL)向上に向けて支援する。また、終末期に向かう対象者がその人らしく過ごせるように支援する。 7) 多様な健康レベルの対象者の再発予防、重症化予防に向けて、教育的視点から関わる。 8) 慢性的な症状を抱えている人々に対し地域の社会資源を活用した退院支援を考える。 9) 予測した成果と照らし合わせて実施した看護の結果を評価し、計画を修正する。 <p>4. 看護専門職を志す学生として、責任と規律を順守し、対象者の尊厳や人権を守り擁護的立場で行動する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者及び対象者を取り巻く人々の意思決定を支える。 2) 対象者の尊厳や人権を守り擁護的立場で行動する。 3) 対象者のプライバシーおよび個人情報を保護する。 4) 臨床における倫理的課題に気付き解決に向けて検討する。 <p>5. 医療安全の基本的な考え方に則り、対象者の個別的な状況から起こりうる危険を予測して、安全を確保する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の心身の発達段階や生活機能障害を踏まえ、安全な治療を行うための管理方法を理解し、実施する。 2) 対象者の心身の発達段階や生活機能障害を踏まえ、安全な生活環境を整える。 3) 感染防止の手順を遵守する。 4) 対象者の安全を確保するための法律について理解し、それに基づいた援助を計画する。 <p>6. 保健・医療・福祉チームにおける看護職の専門性を踏まえ、チームの一員として行動する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 保健・医療・福祉チームにおける看護職及び他職種の機能・役割を理解する。(チームアプローチ) 2) チームの一員として行動する。 3) 様々な場における保健・医療・福祉の連携について、見学および事例を通して理解する。 4) 対象者に必要な社会資源について理解する。 5) 看護チームの一員として報告・連絡・相談する。 		<p>・病棟・外来・在宅において、カンファレンスや多職種との関わりの場面に参加し、チームの一員として行動する。</p> <p>・看護師や多職種の役割についてグループで考えるためのカンファレンスを行う。</p>	

(1) 目的

慢性期看護実習は上述した背景を踏まえ、「1.慢性疾患を抱えあらゆる生活の場で療養している対象者及び対象者を取り巻く人々がその人らしく生きることができるよう QOL の向上をめざしエビデンスに基づいた看護を計画的に実践する。」「2.療養の場における対象者の安全なケア環境を確保する。」「3.地域包括ケアにおける医療チームの一員として多職種の機能役割と相互連携および社会資源の活用について理解する。」の3つを目的とした。

上記の目的に基づき、慢性期看護実習の実習目標および展開について表 9 に示す。

(2) 目的を達成するための方法

① 一般病床・精神病床・療養病床の実習

一般病床の実習では、化学療法や放射線療法など様々な治療が必要な慢性疾患をもつ対象者への看護を、精神病床では精神疾患をもつ対象者への看護を、療養病床ではリハビリテーションが必要な対象者や吸引や持続点滴などの医療処置、エンド・オブ・ライフケアが必要な対象者への看護を学ぶ。学生は対象者を受け持ち、アセスメント、計画、実施、評価のプロセスの実践を通して、6つの実習目標を達成する。

まずは、慢性疾患を持つ対象者への傾聴や共感、受容の重要性を理解し、対象者の苦痛や受容過程を理解する。この実習においては、プロセスレコード用紙等を用いて、対象者との関わりの場面を振り返ることや、グループディスカッションを通して、対象理解や、自己洞察を深める。これらの方法により、慢性的経過をたどる対象者が継続的に治療に取り組めるような援助的関係を形成する。

また、一名の対象者を受け持つことを通して、疾患およびその病態の理解に加え、入院が生活に及ぼす影響や、生活習慣等が疾患に及ぼす影響等についても理解する。特に、一般病床では、検査・治療・処置の目的・種類・方法や合併症の理解に加え、対象者の生活習慣と疾病との関連性や、病状悪化、重症化のリスクと、対処能力を理解する。また、対象者の生きがいや価値観が疾患および自己管理に与える影響についても理解する。さらに終末期にある対象者の受け持ちが可能な場合には、対象者との関わりおよびカンファレンスでの共有化を通して死の受容過程を理解する。

精神病床では、検査・治療・処置の目的・種類・方法や合併症の理解に加え、対象者の病的世界を理解することで、対象者の苦痛や苦悩を理解する。また、入院時から退院後の生活を射程に入れた関わりについて学ぶ。

療養病床では主に処置の目的・種類・方法の理解に加え、エンド・オブ・ライフケアの視点から対象者の死の受容過程を理解する。死の受容過程の理解においては、一般病床と同様に、受け持ち対象者との直接的な関わりに加え、カンファレンスの活用による学びの共有を行う。

さらに、受け持ち対象者を通して生活の視点を踏まえた援助(日常生活援助・アクティビティケアなど)、症状や治療・検査・処置に伴う苦痛の軽減、セルフケア能力が発揮できるための対象者及び対象者を取り巻く人々への支援、社会に適応するための支援、慢性的な